

アレックスの目の前には人形が倒れていた。人形の頭部にはこめかみの部分に何かが通り過ぎていったような穴が空き、穴から微かに見える機器がショートしたのか、穴の周囲は微かに焦げていた。

アレックスの手元にはハンドガンが握られていた。銃口から硝煙が微かに見えている。どうやら自分がこの人形を撃つたらしい。マガジンリリースボタンを押すと、空になった弾倉がカラリとアレックスの足元に落ちた。

「ハア……ハア……」

弾倉が落ちる音を聞いたアレックスは動揺していた。どうって事はない、ただ人形を処分しただけだ。そう自分に言い聞かせながらも額を流れ落ちる汗が動悸で震える肌を急いで落ちていく。

予備の弾倉を交換しながらアレックスは呼吸を整えようと深呼吸をするが、勢い良く息を飲み込んだ拍子に吐瀉物を床にぶちまけながら床に倒れ込んだ。おかしい、こんな筈はない。自分が撃つたものはただの人形だ、射撃用のマトと何も変わらないただのモノなのだ。それなのにどうして――。

咀嚼されたレタス入りのクラブハウスサンドと胃液が混ざった吐瀉物のむせ返る臭いに今にも気を失いそうだ。視界がぼやけて行く中目を擦る気力も沸かずアレックスは自分が撃ち処分した人形に視線を向けると、そこにはモノである筈の人形が別のものに見えていた。

その、別のもの、を見たアレックスは、胃液を口から漏らしながら気を失った。

「ジェシカ！オイオイ、俺はクラブハウスサンドのレタス抜きって言った筈だ。何度言えば分かるんだ？」

「冗談じゃない、今時野菜も食べられない大の大人が居てたまるか。これがウチのクラブハウスサンドなんだから、残さずちゃんと食べなよ」

遠い夢を見ていた、アンドロイドの電腦開発におけるリサーチセンターに従事していた

アレックスはいつもランチに決まった店、決まった席、決まったメニューを頼んでいた。国道沿いにある古びたダイナーで通いやすく、味も特別ウマイ訳でもなかったが食事をどうするか迷うよりはこの場所へ通い続ける方がよほど良い。という理由で、店の奥にある古びた合皮の赤いソファは彼の特等席になっていた。特別な場所と言う程でも愛着がある訳でも無いが、彼はいつもその席に腰を下ろしクラブハウスサンドを注文するのだ。

しかし、一つ問題があった。野菜を食べられないにも関わらず、ウェイトレスのジェシカが運んでくるのは青々としたレタス入りのクラブハウスサンドだったので、彼は決まってジェシカに文句を言うが、野菜くらい食べなさいと一蹴されてしまう。そんな押し問答が毎日続くのでいつしかアレックスとジェシカとの言い争いはその店の名物へと変わっていった。

「……全く、別にこんな青臭いモン食べなくても人間生きていけるんだ。俺は食べないかな」

「へッ、肉ばかり食ってちやくっさい臭いを出すだけのただのオッサンになっちまうだろうが。この店に臭い客はいらないよ」

「いつもいつも違う文句ばかりよく出てくるモンだ、俺は食べねえからな！」

「今日が駄目でも明日また同じ事をするだけだってんだ、ほらさっさと食べなよ」

アレックスはぶつくさと言いながら挟まれたレタスを少しだけかじると、野菜独特の葉の香りが口の中に広がる。この香りがダメなんだと言わんばかりにアレックスの顔は拒絶反応を示し、急いで一緒に頼んだコーラを煽りながら小さなレタスの欠片を喉の奥に押し込む。コーラの香辛料の香りで口の中の不快感は無くなったが、あの青臭いモノを口の中に入れたという事実がどうにも居心地が悪く、今にもレタスを抜いて灰皿に捨ててしまいたい気持ちだった。

「こりゃ傑作だ、今時の歳の子供だってそんなに嫌がりはいしないよ。食べちまえば慣れるもんさ」

その様子を見たジェシカはカウンター越しに小言を挟んでくる。

「つたくうるせえな！ゴチャゴチャ言っでさっさと仕事に戻れよタコ！」

そう言うと、ジェシカは笑いながらキッチンへと消えていった。どうして毎度毎度こんなに悔しい思いをしてまでこの店へ通っている自分が不思議だと、毎日考えていたが不思議とその後、アレックスは悪い気はしなかった。

その後、アレックスは追加でコーラを三杯注文しながらレタスを含む全てのクラブハウスサンドを平らげて出て行った。

「なんだアレックス、しょぼくれた小犬みてえな顔しやがってよ。今日も負けたのか？」

店を出ると常連仲間のケビンと出会った。浅黒い肌に赤いアロハシャツとハーフパンツのいかにも南米から出てきましたと言わんばかりなケビンとは、ジェシカとの口喧嘩を通

じて知り合った仲間だったが、同じ職場で働いている事に後になって気が付いた。職場内で話す事はあまり無いが、彼もこのダイナーの常連だった。

「うるせえ、俺はあんな青臭いモン食べなくてもやっててんだ。あんな奴とつとと辞めちまった方が清々するぜ」

「お前何も分かっちゃいねえな」

「は？何がだよ」

ケビンため息をつき、アレックスの肩に腕を回しながら駐車場の車の間に案内した。

「ジェシカはな、お前に気があるんだよ。まだ気付かねえってのは流石に笑えるぜ。毎日毎日お前が頼むものにたんまり野菜を入れてんのも肉とかジャンクフードばっか食ってるお前の健康を気遣っての事なんだ」

「……んなバカな話があるか、どうせ出任せの冗談だろう」

「本当の事だからこうしてコソコソしながらお前に言ってるんじゃないか。お前の居ない店ですつと話してんだぞ？」

「……てことは他の常連客はこの事を全部知ってるのか？」

「当然だ。お前がいつ気付くか、気付かないかで賭けをしてる連中まで居る。いいからさっさと言ってこい」

「読めた、お前もその話に乗ってんだろ」

「ご名答、いいからさっさと行ってこい。女性はあんまり待たせるモンじゃないぜ」

「しかし俺はそろそろ仕事に戻らにゃならん。明日出直すわ」

「そういうことだと思ってお前は午後から休む旨を伝えておいた。残念だったな」

「へへ、毎度あり」

「……クソが」

アレックスはその日、ジェシカと交際を始めることになった。

アレックスが目を覚ますと見知らぬ白い天井がそこにはあった。消毒液のような独特な匂いが鼻につき、今自分は病院の機能を持った場所に居るという事を理解した。

「大丈夫か？」

クラウドが視界に入ってきた。

「お前が吐瀉物をぶち撒けながら倒れている所を別の職員が発見した。窒息による脳への障害も今のお前の様子を見れば問題は無いようだな。ただ暫くここで安静にしていると良い」

「何が起きたっていうんだ？いきなり施設内のアンドロイドがおかしくなっちゃって、俺はそのまま自衛の為に……」

クラウドはパイプ椅子をアレックスの横たわるベッドの横につけ、腰を下ろして重い口調で説明を始めた。

「アンドロイドの暴走は人為的なものだ。Phantの開発に従事していた職員の……お前と同時期に来た尚美という職員が居ただろう、彼女はPhantを許可なく起動させたまま意図的に通信を行い、施設内のアンドロイドを暴走させた。これはまだ可能性の話だが、彼女がこの情報を意図的に外部へ漏洩させる為に暴走を起こしたという恐れもある。お前はここへ来るまで尚美と一緒にいただろう。彼女に何か不審な点は見受けられなかったか？」

「ちよつと待ってくれ。突然の事でこっちは何がなんだかさっぱり分からん。尚美の事は直接アイツに聞けば良いんじゃないのか？彼女の確保は既に済ませてあるんだろう？」

「いや、彼女は私が射殺した……筈だった」

「筈だった？」

「遺体が見つかっていないんだ。それに彼女の死後、何者かがベンサレム内部に侵入した記録も出ている」

「何者かの手によって尚美はベンサレムへ意識を転送された……？」

「分からん。ただ彼女は今ベンサレム内部に逃走している事だけは確かだ」

「じゃあベンサレムへ侵入して直接彼女から話を聞けばいいんじゃないのか？サーバーサイドのアンタならそれくらい出来るだろう？」

「無理なんだ……尚美に接続すると事は理論上は可能だ。だが、彼女の発する言語はもはや人間の発する言葉とは全く異なる……その言葉を受信、翻訳する役割をPhantに積んでいる為、我々ではどうにもならない。それに今回の件で多くの怪我人も出てしまった……周りを見る……」

身を起こし、周囲を伺うと病室内のベッドは満員になっていた。中には膝から下が無い者、顔の半分を包帯で覆い隠されているものの、明らかに顔面が陥没していた者達がそれぞれ一人ずつベッドの上でいつ戻ってくるかも分からない意識を遥か遠くへ置いて皆静かに眠っていた。

「……まだこの場所に安置されている者達は良い方だ。中には犠牲になった者も居る……お前の中にある尚美への情が少しでも湧いているのだとしたら、それは捨てた方が良い。彼女が起こした今の状況を見て同じ事が言えるのなら……」

アレックスは周囲の様相を見て眉を潜めた。食道から何か気持ち悪い物の匂いを感じ、頭から冷や汗が出そうな思いだったが、その症状の出所は怪我人達の様子を見て感じた事ではなく、また別の遠い記憶の中から起因するものだった。

頭を掻きむしりながらアレックスはゆっくりとクラウドスの問いに答えた。

「……尚美とは話したが、アンタが警戒している産業スパイやテロの線は薄いと俺は思っている。そういう器用な立ち回りが出来るような人間だとは思わない。むしろその逆、小さな事にも立ち止まっていちいち悩んでしまうような、そんな不器用な側面を多く感じた」

「強いて言うなら物に対する愛情は人一倍強いようだった。Phantの開発を経て彼女は影響されてしまったんじゃないか？」

「一体何に？」

「言葉に表し辛いけど、自らの理想とかそういうものさ」

「……なるほど。しかし何にせよ今回の件でこの施設は大きな損害を被ってしまった。彼女の言う、理想がもたらした結果によってね。Phantの開発職員の人的被害が特に著しい。」

危険はあると思うがアレックス、お前が開発作業を引き継いでくれないだろうか」

クラウスの突然の申し出にアレックスは若干惑った。が、嫌な気持ちは胸の中には無かった。自分がこへ来た目的を言えば少々の危険など自分にとってはどうでも良い事だった。アレックスは胸に手を当てながらクラウスの申し出を受け入れた。

「……そういえば、俺の私物は？ ハードディスクドライブが何処かに無かったか？」

「お前が倒れていた時に持っていた私物は全てベッド脇の棚の中にまとめてある。ハードディスクもそこだ。しかし変わった男だな、こんな時代にハードディスクなんて化石を持ってるなんて」

アレックスは我を忘れたように棚の中へ手を伸ばすと、確かにハードディスクご真空パック用のアルミ容器の中で衝撃吸収用のスポンジに覆われた姿でそのまま残っていた。

ハードディスクを大事そうに抱え込むアレックスにクラウスは疑問を覚え、その中に何のデータが入っているのか質問してみたくなった。

「よほど大事そうに見えるが……何が入っているんだ？」

「……〽️ 年前に妻を亡くしてね……彼女との思い出がこの中に入ってるんだ」

「それは済まなかった……しかし、物理デバイスでは持ち歩きに不安もあるだろう、クラウドにはデータを預けたりしないのか？」

「いいや、いいんだ……実態のない物に自分の大事な物を預けるより、物として持つておきたいのさ。その方が彼女の側にいるような気がして安心するんだ……」

まるで産まれたての赤子を大事に抱くかのようにハードディスクを抱き抱えるアレックスを見てクラウスは若干違和感を感じたが、よほど彼にとって妻の存在は大きかったのだろうという同情心が彼の違和感を拭い去った。

「まあいい……しばらくは安静にしているといい。回復が完了したら頼むぞ」

「いや……いい。こんな場所に居る方がどうにかなっちまいそうだ……すぐにでも案内してくれ」

アレックスは、自身に繋がっていた点滴のチューブを乱暴に引き抜き、裸足のままクラウスの元へ向かった。

「……分かった。だが先に着替えてからにしてくれないか、その格好で居ても風邪を引くだけだ」

アレックスはその時初めて自分がワンピース型の患者着を身に付けている事に気が付いた。股の間を通り抜ける冷たい風の感覚に思わず内股の姿勢になり、挙動不審な歩きをしながらクラウスの後を追って行った。

着替えを済ませたアレックスは、クラウスと共にアレックスの作業ブースへと足を運んだ。鉄製の扉に「C」をかざすと、部屋を覆い尽くす煙草の匂いがクラウスの鼻を突いた。



「臭いな、吸い過ぎじゃないのか？」

クラウドスのデスクトップ脇には、空の缶詰があり、その中に無造作に押し込まれた煙草の吸殻がまるで剣山のようにそびえ立っており、焦げた煙草の葉の独特な匂いが部屋の中を埋め尽くしていた。

「この方が落ち着くのさ」

アレックスは、頭を掻きむしりながらコーヒーの染みらしきものが染み付いた椅子に慣れたように腰掛け、再び煙草に火をつける。

「今の時代煙草を吸うなんて古風というか、変わってるというか……百害あって一利なしだろう」

アレックスに差し出されたパイプ椅子に腰をかけたクラウドスは、けむたりながらもアレックスに質問をした。

「初めは吸ってなかったんだがね、妻が居なくなつて、いつの間にか始めちゃった。健康に悪い事は分かってるさ、でも悪い事はかりじゃないさ」

「辞めるつもりは無いのか？」

「どうせ長く生きてもしようがないんだ。それより、仕事の話をしようぜ」

アレックスの顔はどこか空虚で底の見えない深い所に落ちていくような危うさを帯びていた。クラウドスは、これ以上言及するのは野暮だと感じたので仕事の話を切り出すことにした。

「先ほど説明した通りPhantの意思決定プログラムの開発に従事してもらいたい。かつては尚美が担当していたが、この騒ぎがあつて……今はかなりの人員不足なんだ。Phantのデータは今は確認する事は出来ないが……私のPCへ接続してみたい」

アレックスはサーバーへ接続を行い、クラウドスのPCへ接続するとクラウドスの指示を仰ぎながらPhantのデータフォルダに辿り着いた。

大量のデータを掻き分けて慣れた手つきでファイルに目を通すアレックスを背にクラウドスは続けて要件を説明する。

「例の騒ぎが起きた後、一度データを巻き戻してある。致命的なバグが発生したままだとまずいからな。一見通常のアンドロイド用のOSのデータフォーマットと変わらないように見えるが、Phantは人格がまるであるように振舞っている……そのデータの中に手掛かりがあるはずなのだが、何か不審な点はないだろうか？」

「何もソフトウェア側のエラーとまだ決まったわけじゃないだろう。ハードウェアの方は？Phantは通常のアンドロイドより性能が高いと聞いているが？」

「確かに。Phantは通常のアンドロイドより長期的な運用を想定して電脳内の擬似ニューロンの数はかなり多い。ただそれもデータサーバー用のアンドロイドに毛が生えた程度ではない。ハードウェアは消耗品だからな。故に定期的に別途のサーバーへバックアップ

を取り、本体の更新が行われる際に再度再インストールを行う運用を想定している。故にハードウェアが関係しているとは考えづらい。事実、我々はエラーの出た Phant を破壊処理し、何度も同じ事を試してみた」

「あーわかった、俺が悪かった……確かに違和感はある。意思決定系のソースコードのファイルサイズが異常にデカイ。が、Phant はこれまでのアンドロイドと違って情報処理に関するスペックを大幅に上げているから杞憂かもしれないが……しかし、大量に生成されているログファイルの生成トリガーがこのファイルになっている事も疑問だ。もう少し詳しく見てみれば分かるかもしれないがな」

「おお……対処出来そうか？」

「対処はできると思う。ただ、ちょっと気になる点があつてな。大量に吐き出されているキャッシュファイルやソースコードの不審な点……意思決定系に何らかの異常があるとすると、この義体は初めからそういう意図を持って設計されたとは思えない。高度な情報処理をさせるにしてもこんな手の込んだ事はしない。今俺がこれに触れてるって事はこれを開発した張本人は、辞職してるか既に居ないかだが……アンタ、そいつと一緒にいた事は無いのかね？」

「開発者本人はラザムという名の男だ。何かあつたとすれば思い当たらないが……ただ彼は何か思い詰めた様子でこれを造っていたよ。その真相を聞く前に初回起動テストの際、事故に紛れて死んでしまったがな……」

アレックスが啞えていた煙草の先かなりの長さの肺があり、それが脚の上に落ちて焦った様子でアレックスは肺を急いで振り払った。そしてその肺には目もくれない様子で大きなため息を漏らした。

「大方それが原因だろうな。恐らくアンドロイドに何らかの人格を搭載させようとしたんだろう。法律で禁じられてるが、この海底でなら周りの目を気にする事なく出来るだろうしな」

「人格を、意図的に搭載させた……？」

「そうだ。勿論それによるメリットは恐らく無いだろう。寧ろ運用の観点から言えばデメリットの方が大きい。今眠ってる Phant って子は、俺たちとさほど変わらないと言っているまでのモノを持ってるだろうからな」

「そんなバカな、ただの機械が我々と同じなど……」

「同じさ。スマートフォンや車と同じような機械だと俺たちが思っているのは法によって俺たちと機械を区別していたからに過ぎない。その軀が無くなった今ではより俺たちに近いものになっているのかもしれない……まあ、まだあくまで可能性の上での話だがな」アレックスは新たに煙草に火を付けた。

「例えそうだとしても、機械は機械である事に変わりはない。アレックス、君に Phant を完成させて貰いたい」

クラウスの懇願にアレックスは空になった煙草の箱をコツコツと叩いた。

「いいけど、条件とつけても良いわけ？」

「何だ？」

「煙草のストックが減ってきてるんだ、コイツが無いとどうにもダメでな……ここは海底だが日用品や嗜好品は申請すりゃ仕入れてくれるんだろう？」

「ああ、集荷された荷物が週に一度潜水艦で届けられる」

「遅っせえなあ、地上のネットストアなら注文すりゃあ即ドローンが配達してくれるって

言うのによお」

「我慢してくれ、ここは海中なんだ」

「……分かった。それじゃあ、くれぐれも頼んだぜ。ラッキーストライクを2カートン程、よろしくな」

「健康には気をつけろよ……」

「間に合ってるさ」

そう、健康になんて気を遣う必要はない。最愛の妻だったジェシカの居ないこの世界に自分が居る理由など既に無い。丁度良い口喧嘩の相手が居なくなったからじゃない、自分を捧げてもいい程大事だったものが抜け落ちてしまったのだ。彼女はアレックスが生きる理由だった。

彼女の居ない世界など興味は無い、だから煙草を吸い始めた。

一本の煙草を吸えば、およそ自分の寿命が削れるという。喜ばしい事じゃないかとアレックスは思った、少しでも妻と再会する時間が短くなるのであれば――。

半ばケビン の賭けに協力する形でジェシカに話を聞きに行ったアレックスだったが、その後アレックスとジェシカは交際する形となり、そのまま結婚をする形となった。妻となったジェシカは余程の事がない限り自分を曲げる事は無い性格だったので、アレックスの食卓には毎日野菜が並ぶ事になり、小競り合いは夫婦となっても毎日続いていたがアレックスが手に入れたささやかな幸せに比べれば些細な事だった。これから死ぬまでこのささやかな幸せを享受出来るのだと思っていた。

結婚して8年程経った後、アレックスが仕事から帰宅するといつも先に帰っていたジェシカは家には居なかった。キッチンには作りかけの夕食がそのまま放置されていたので一度帰宅していた事は間違いない。ジェシカが持っていた携帯電話も部屋に放置されており、外出用のハンドバッグも財布も家に残されていた事から、はじめは何か用があつて外へ出ているのだろう、どうせすぐに帰ってくるだろうと思っていた。しかし、30分程過ぎてジェシカが帰ってくる様子は無い。アレックスは嫌な予感がしてテレビをつけたまま家の中を歩き回った。

家のどこも朝に見たいいつもの家のままだったので、強盗や誘拐のような類の人物がこの家に来たという事ではないだろうと思ったが、違和感が無いからこそアレックスの胸の内は気持ち悪かった。警察へ捜索願の電話をかけたほうが良いだろうか……？とリビングにあった携帯電話に手を伸ばした瞬間、テレビに映っていたニュースの映像を見てアレックスの体内に流れる血が凍りつくような音がした。

「国道沿いに遺体、身元不明の女性」

テロップ自体にさほど驚きはしなかったが、ニュースで映し出されている映像はアレックスがよく行くダイナーの周辺がパトカーと立入禁止のテープが貼り巡らされている映像だった。

まさか……？と思い、車を出そうとするアレックスだったがズボンのポケットに入っていた携帯電話のバイブレーションが揺れだしたので、舌打ちをしながら携帯電話を取り出した。見慣れない番号からの電話だったので恐る恐る電話に出ると、警察を名乗る男が落ち着いた口調でアレックスの身元を確認し、事情を説明した。



アレックスは急いで車を走らせた。嘘だ、そんな事がある筈がない。と頭の中で何度も復唱しながら信号を何度も無視した。突然訪れた残酷な現実を前にするのが精一杯で規範を気にする余裕など無かった。

車は病院ではなく警察署に止まった。急いで車を降りてドアの施錠もしないまま受付で担当者の名前を告げると、そのまま安置所へ案内された。

ステンレス製の冷たい扉を開けると、白いシャツがかけられたベッドの上に妻が横たわっていた。勝気で小言ばかり言っていたジェシカの顔は静かに眠っていた。どんな事しても死なないと思っていたのに今目の前には血の気の抜けた青白い顔で二度と目を冷ますことは無いであろう妻の姿がアレックスの目の前に映っていた。アレックスの身体は小刻みに震えていた。

「……妻を殺した奴は？」

「既に逮捕しております。ですが……」

警官は言葉を詰まらせた。

「いいから言ってくれ」

アレックスがそう言う警官は携帯端末から写真のデータを表示した。

「犯人はあなたと同じ職場に居たケビンという男です。ジェシカさんの居たダイナーの近くで発見されました。凶器に使用された包丁の指紋や現場の毛髪、体液のDNA鑑定も一致しています」

「……あのクソツタレは今どこに居る？」

「申し上げにくいのですが……我々が発見した時には既に死亡していました」

アレックスの身体から力が抜けた。最愛の妻の命を奪った張本人から話を聞く機会も、復讐する機会さえも一瞬の内に無くなってしまった。妻を失った動揺や悲しみ、自分から大事なものを奪ったケビンへの怨みの感情をぶつける先はどこにも無いのだ。

呪いにも似た感情を何故自分が抱え続けなければならないのか、なぜ妻は死ななければならなかったのか、何が何だか分からなくなってしまい、アレックスはその場に崩れ落ち嘔吐した。胃液の混じった吐瀉物が喉を通り過ぎると食道が焼けてビリビリとした感覚だけが残った。

妻はこれより苦しい思いをしたに違いない。それなのに自分はただ嘔吐をしただけで彼女の苦しみの一部ですら理解出来ない事に苛立ち、似合わない涙が額からこぼれ落ちた。

駆け寄った警官を背にアレックスは大声で声が枯れるまで泣き続けた。

「お巡りさん、部屋を汚して悪かったな……」

「とんでもございません、今回の件は容疑者が既に確保されている事から奥様が司法解剖を受ける事はございません。ですが、ご遺体はこちらでなるべく綺麗にさせていただきます。おります、このまま一緒に帰宅頂くことも出来ますが……どうなさいますか？」

「そうさせてくれ。今は彼女と出来るだけ一緒に居たい」

「そうですか。それではこちらで奥様をご自宅まで搬送させて頂きます」

アレックスは妻と一緒に帰宅すると、しばらく妻を見つめた後、たまたま持ち帰っていた脳派を検知する為の機器をジェシカの頭の至る所に貼り付けていく。そしてその機器から微弱の電流を流しPCのモニタを見つめ続けた。

こんな事あったまるとアレックスは考えていた。突如訪れた不幸を受け入れられる程アレックスの心は強くなかった。PCのモニタ上に検知した脳波のデータが読み取られていく。次々と吐き出されていくデータをハードディスクに収めていきながらアレックスは夜通しで作業を続けた。彼はいつかまた妻に会う為に妻の脳内の記憶を読み取ってデータとして記録していたのだ。彼女はまだ死んではない、いつかまた妻に再会出来る筈だという事を夢見ながら。

暫く待っているとクラウドからPhantの開発フォルダのアクセス権限が付与された。先程まで見ていたファイルの中身に目を通すと、びっしりとコードがモニターを覆い尽くしていた。他人の書いたコードを改良するなど普通はあまりやりたくなかったが、やれやれと思いながらアレックスはコードの記述に目を通していく。

幸い、構造自体は綺麗だったので原因の特定はさほど難しいものではなかった。意思決定を示す為のファイルパスが見つかったので、すかさず元のファイルにカーソルを合わせてアクセスを行う。

そのファイルにある文字列を見て、アレックスの喉に唾液が通過し音が鳴った。

「オイオイ、マジかよ」

アレックスの予想は当たっていた。Phantには誰かの人格がそっくりそのまま搭載されていたのだった。それも、人が設計したのではない、人間の誰かの脳データをそのまま移し替えたかのような。

その文字列を見てアレックスはたまらず胸元に閉まっていたハードディスクを握りしめた。人間の脳の構造を模して作られていたアンドロイドの脳内における小脳から脳全体に発せられる疑似ニューロンの数が規定数より大幅に上昇しており、脳内の各部位に蓄積されたデータは海馬に一時的に蓄積されて必要なデータを割り振りされていた。

通常のアンドロイドは、意思決定のプロセスにおいて小脳と海馬に相当する部分に意図的な成約を設ける事によっていわゆる意識の発生に成約をかけていたが、Phantに搭載されていた脳内においてはその成約を外しより人間に近い形に調整されていた。

それだけではなく、海馬に蓄積された「必要の無い」データに至るまでも状況に応じて記憶を引き出す事が出来るよう関連付けされていた他、Phantの判断で物事を忘れる事が出来るという可能性も示唆していた。例えば、暗い部屋で発光ダイオードのON/OFFの切り替えをし、明るいか、明るくないかの判断を行うテストがあったとして、機械が明るいという事しか区別出来ないとしたら、人間は暗い状態と明るい状態に応じて正確な回答を用意する事は出来るが、暗い環境に見える僅かな色や光、部屋の環境、空気、そして記憶から来る未知なるものの想像を一瞬で行い、取捨選択を行う事が出来る。そうした星の数とも思える量の可能性を並列し、そして明るい、暗いという選択を最終的に選び取る事が出来るのが人間だ。今アレックスが見つめているアンドロイドの脳内は同様の事が出来るのだ。

つまり、人間との違いは体内の構造がナマモノであるか、そうでないかの違いしかなく

ほぼ人間と言っても造作の無い程の筐体の中身をアレックスは見ていたのだ。造られた電脳の中身はどうなっているのだろうかとアレックスの関心は深まっていった。

海馬にあたる部位に蓄積されたデータの断片を見渡しながら、アレックスはこの電脳内には自分と変わらない意識が存在している事を確信した。この意識の持ち主のパーソナルこそ分からなかったものの、これはもはや人間とほぼ変わらないと言っても良い程の代物に違いない。焦る気持ちを胸にアレックスは胸元にあるハードディスクドライブを作業用のデスクトップに接続した。

「すまないが俺にももう一度、逢いたい奴がいるんだ。悪いな……」

このアンドロイド筐体を設計した人間も、誰かに再び会いたいという願望を持って設計を行った筈だ。そうでなければ意図的に意識を持たせる事を前提とした設計は行わない筈だ。故にアレックス自身が今相対しているデータを自らの裁量で書き換える事は若干の良心の呵責を感じた。仮にこの筐体内に収容されている意識を人間とそう変わらない物として扱うのなら、自分が今やろうとしている事は殺人とそう大して変わりはない。

何を迷う必要があるのか。とアレックスは思った。自分は妻にまた会いたいのだ、その為のチャンスが今目の前に、自分の手の平の中で収まっている。彼女にまた会えるなら自分はどんな手を使ってでも会いに行く。たとえそれが知らない誰かを手にかかる結果を招いたとしても――。

「クラウドス、原因が判明した。恐らくアンタの望む結果に辿り着けそうなんだが、データの処理に一晩程時間がかかる。こちらの作業が終了したら検証用にPhantを起動しても？」  
「本当か、よかった……やはりお前を信じてよかったよ。起動は許可しよう。が……くれぐれも細心の注意を図ってくれ。護身用の銃を携帯する事も忘れないようにな、無論使用しない事に越したことはないが……」

「分かってるさ、安心してくれ」

アレックスは目の前にあるPhantの記憶データに、過去に読み取った自らの妻の記憶データを上書きする処理を加えると、ディスプレイにデータの書き換えの進捗を示すバーが出現した。アレックスはそのバーを見ながら新しい煙草を取り出し、火をつけた。

これが上手く行けば最後の煙草になるかもしれない……妻の死から〇年、それはアレックスにとって途方もなく長い時間だった。妻と一緒にいた時の写真を見返すと、現在とは比べ物にならないくらい若々しい自分の姿があった。生き生きとした表情、剃り整えられた髭、糊の効いた白いワイシャツ、そして屈託のない笑顔がそこにはあった。今の自分とはまるで対照的だ、煙草を始め野菜を食べる事も辞め髪や髭はぼさぼさになりやつれた顔をしている。この〇年で随分と老け込んだものだとアレックスは思った。無理もない、妻の意識こそ救出したと思ひ込んでいたものの、実生活では孤独がアレックスを蝕んで行った。

妻の身体が埋葬された事をきっかけに、アレックスの生活から妻の痕跡が次々と消えていく。自宅に残った妻の匂い、生活習慣、私物が少しずつ減って行き、アレックスの心を

蝕んで行った。

明日からはまた、妻との生活を始められるかもしれない……年前妻の亡骸から記憶を取り出したあの日から自分の中で何かが崩れ落ちてしまったが、それも今日で終われるかもしれない。

フィルターまで火の回った煙草を灰皿に押し付けると、アレックスはシャワーも浴びずにベッドに入りそのまま眠った。妻と再会した時にはまた憎たらしい野菜入りのクラブハウスサンドを食べたいと願いながら。

朝の時間を告げるアラームの音がアレックスの耳元に届き、目も開けないままアラームのスイッチを叩くように乱暴に押すと、アレックスの一日が始まった。

起き上がり屈伸をしながら思い切り息を吸うと、懐かしい香りがアレックスの鼻に届いた。煙草の吸殻の匂いに混じって、何か小麦や肉類のようなものが混じった香りがした。

アレックスは周囲を見渡すと、作業用のデスクの上にレタス入りのクラブハウスサンドが置かれていた。

偶然だろうか？とアレックスは思った。たまたま朝食のオートデリバリーがクラブハウスサンドを持ってきた可能性もある。しかし、アレックスが昨夜行った事に対しての結果だとしたら……と思うと期待に心が躍った。

急いで Phant 用の作業コンソールを立ち上げると、あるメッセージが書き残されていた。

「いい加減野菜に慣れなさい、あなたの事を心配しているの」

そのメッセージを見てアレックスの心は躍った。自らが待ち望んだ結果が遂に来たと確信したからだ。自分の目の前にあの日食べたクラブハウスサンドが置かれていた事は嬉しかったが、今はそれより最愛の妻ジェシカに再会する方が先だった。

アレックスは足早に妻の義体が収容されている部屋を調べると、朝食を放置したまま急いで妻の元へ走って向かっていった。

「ジェシカ……」

妻の筐体が収容されている部屋に入ると、そこには起動したばかりの裸の状態の少女型アンドロイドが居た。外見は妻と違うようだったが、室内で稼働している唯一のアンドロイドだったのでアレックスはその少女型アンドロイドが妻だとすぐに分かった。

「アレックス……そんなにやつれた顔をしてどうしたんだい。ちゃんと朝食は食べたのか？」

「間違いない……ジェシカだ……よかった」

男勝りな口調で語る少女型のアンドロイドを見てアレックスは妻が戻ってきたと安心して、膝から崩れ落ちた。その様子を見た妻のジェシカは笑いながらアレックスに駆け寄ってくる。

「なんだいそのザマは。もしかしてアンタ、あたしにずっと会えなくて寂しかったとでも

言うつもりじゃないだろうね？」

再会した直後に突かれた悪態もアレックスにとっては嬉しいものだった。これが無ければ自分の妻ではないと思ったからだ。

「うるせえ、そんなんじゃないやねえよ。それよりお前……これでも着ろ。裸のままじゃいかなだろ」

アレックスは自らが着ていたジャケットをジェシカに差し出した。

「汗臭そうなジャケットだねえ……どうせ昨日もこれ着てたまま寝てたんだろ」

「お前……匂いまで分かるのか」

「シなモン見りやすぐ分かるさ、けどありがたく貰っておくよ。助かる」

「……そうだ、ジェシカ。話しておかにやらん事がある。少々申し訳ないお願いなんだが……」

「ん、何だい？」

アレックスは、ジェシカがインストールされている筐体の役割を説明した。本来ジェシカの居る筐体は巨大なサーバー「ベンサレム」に転送された死者の意思と通信する為の役割を持った高性能のアンドロイドであり、その役割はその通信結果を人類に伝達する事であり、アンドロイド自体の意識自体は「無いもの」を前提に設計されている事になっている為、人前ではそのように振る舞って欲しい。という事を説明した。

本来のジェシカならそんな提案飲み込むはずが無い。どうしてこんな真似をしたんだと自分を一蹴するに違いないと思っていた。昨晩は妻が戻ってくるかもしれないという事に気を取られすぎてしまっていた為、アレックスは過去の自分の迂闊さを呪った。

「分かった……アンタの為ならそうするよ」

返答は意外なものだった、ジェシカはアレックスの相談をすんなりと受け入れたのだ。あの跳ねっ返りのジェシカがそんな事をする筈がないと思っていたのに。

「お前……珍しいな、明日は雪でも降るか？ いや、海底のここじゃあどんな天気でも関係ねえが」

「何言ってるんだい、あたしはあたしだよ。それより朝食は？ どうせ食べてないんだろう？」

「あ、ああ……お前と食べようと思ってたんだ」

「あたしは食べられないだろう、見ててやるからさっさと食べなよ」

「……そうだったな、それじゃあ行こう」

アレックスとジェシカは足早にアレックスが働いているブースへと向かった。

「汚ったな……アンタ、あたしがいない間にどうしちゃったんだい」

アレックスの部屋に戻るやいなや、ジェシカが言った一言目がそれだった。



「そう言うがな……こっちは大変だったんだぞ……お前がいなかったお陰で張り合いがねえってモンじゃねえ」

「そりゃ煙草だつて始めちゃう訳だ……まあ、でもあたしもアンタの立場ならそうなたたかもしれないから笑えないな……腹空いてるだろ、まずは食べなよ」

「……分かった」

アレックスは席につくと、クラブハウスサンドを頬張ろうとした。が、どうしてもレタスの青臭さに身体が拒絶反応を示してしまふ。渋々とレタスを抜こうとするとジェシカが声を掛けた。

「そうか……野菜嫌いだったね、すまない事をした」

「……え？」

アレックスの頭に疑問がよぎった。ジェシカと生活していた時は嫌がっても頑なに野菜を食べさせようとしたジェシカだったが、今はその心があっさりとは折れている。機械の身体になってしまい食事の必要が無くなってしまったからなのか、自分と会うのが久々の事だからだったのか、それは分からないが何か引掛かるのだ。

先程自分以外の人間の居る場所では、機械のふりをしていて欲しいという話をした時でも恐らくジェシカ本人なら絶対に納得しなかったのに、あの時もすんなりと自分の話を受け入れている。

「おいおい、冗談だろ？前は意地でも野菜を食えって言ったのに。どうしちゃったんだ？」  
「そうだったわけ？でも、もういいじゃんか。好きなものを好きなだけ食べたって」

どうしてしまったのか、ジェシカからは絶対に出てこなさそうな言葉が次々と出てくる。しかし、生身の身体から機械の身体に移ってしまった事でジェシカの身に何らかの変化が起きたのかもしれない。アレックスはそう思うようにして、朝食を全て平らげた。勿論レタスを残して。

「アレックス、Phantの様子はどうだ？」

朝食を終えて一服した後しばらくすると、クラウドから音声通話が届いた。

「起床後アンタに言われた通り、俺の立ち会いの元一通りチェックしてみた。今の所正常に動作しているようだが、今後何かあつては困るんでな……今は俺の部屋でデータが正常に動いているかチェックしている。後でそっちにお披露目もできそうだ」

「おお……そうか、これでようやく一歩前に進めるな……やはりお前に任せて正解だったよ。ありがとう、引き続きPhantの精査にあたってくれ」

「分かった。一通り調べて問題なさそうだったらそっちにも顔を出すよ」

「ありがとう、良い報告を期待している」

クラウドとの通信を終えるとアレックスは良心の呵責を覚えた。Phantの意識を司る部分が発芽しないようプログラムの修正を行うという作業を問題なく終えたという嘘をクラウドについたからだ。本当はどの部分だって治っていない。ただ自分はPhantという義体に収容された意識のデータを書き換えたただけだ。

この事がクラウドにバレたら無論問題になるだろうし、自らの手で復活させた妻に手をかけてしまう結果になるだろう。故にアレックスは自らがついた嘘を突き通し続ける必要があった。

でも、これで良かったのだと自らを肯定した。自分が書き換えたデータに抜けが無いかどうか妻の脳内に収容されているデータを見渡すが、問題なく動作しているようだ。若干違和感も感じるがまた逢えた喜びに比べれば些細なものだ。

「アレックス、何を見てるんだい？」

自らの脳の中を覗き見られている事を知らないジェシカがアレックスに語りかけると、違和感を感じた。これまで人の頭の中を見わたしながらその当人と喋る事などしてこなかったのだ。むしろ他人の知らない部分を無断で覗き見てしまっているという背徳感すらあった。

「ああ……なんでもない、すぐに終わるさ。ところでジェシカ、この後お前をこの施設の人間達に合わせようと思うんだが、さっき俺が言った事覚えてるか？」

アレックスはジェシカに向かって恐る恐る聞いた。

「ああ……アンタ以外の人間の前では機械のふりをしていろって……気が進まないけどアンタにとって必要な事なんだろう。そうするよ」

ジェシカはアレックスの事情を察してすんなりと受け入れた。まただ……以前のジェシカなら絶対に嫌だと喚き散らすのに、嘘みたいに自分の言う事を受け入れている。おかしい所はどこにも無い筈だ、以前の妻の記憶も、データの書き換えも問題なく出来ていた筈だ。それなのに、今自分の目の前に居るジェシカはどこかが違うように思えてならない。

「アレックス、そんなにぼつとしてどうしたんだ？」

いや、考えるのはよそう。今目の前に自分の妻が居る、それだけで充分じゃないか。この日の為にどれだけ待ち望んだのか、その苦勞を思えばこれ以上の贅沢を望むべきではない。

「なんでもない、クラウドの元へ行こう」

「ああ、分かった」

「クラウド、待たせたな」

クラウドの居るサーバールームへ訪れると、Phantの完成を待ちわびていたクラウドをはじめとした研究員達の視線が一気にアレックスの元へ集まった。

アレックスがジェシカの事をPhantと呼ぶと、ぎこちない動きをしたジェシカがアレックス以外の人間達の元へ現れた。すると、室内に歓声が湧き上がった。

「まさかこんなに早い時間で完成させるとはな……以前の人間のふりをしていたようなバージョンとは大きく見違えている……完璧だ」

クラウスが Phant の見た目をしたジェシカの肩へ触れようとすると、Phant は反射的にクラウスの腕を振り払った。

「……まだ細かいバグが残っているのか？」

「あ、ああ。流石に一晚では粗いバグを取り除くのが精一杯だったんでな、まだ細かい箇所の動作は調整中だ」

「そうか……でもこれで我々のプロジェクトは大きく前進する事が出来た。感謝するよ、アレックス。今夜は Phant のアップデート記念に一緒にパーティーでも……どうだ？」

「いや、俺にはまだやる事が残ってるんでね……暫く自分の部屋で作業を続けさせてくれないか……まだ細かいバグも幾つか残ってるようだし、引き続き調査せねばならん事だしな……」

「……分かった。仕事熱心なのは結構だが、お前はまだ先日の暴走事件から復帰したばかりなんだ。あまり無理はするなよ……」

「分かってるさ……なあに、近々ベンサレムって奴を拝めるよう何とかしてみせるさ」

そう言い残すとアレックスはジェシカと一緒にサーバルームから出て行った。

「一体どうしたんだ？あのクラウスの奴が触れようとした瞬間……」

「いや……分からないんだよ。けど、どうしてもあの男に触れられると思うと嫌な感じがするんだ。変だね……昔はあのダイナーで知らない男に突然触られても平気でやり返してたのに……まるであたしじゃない誰かがあのクラウスって男を拒んだみたいな感じだった……あたしも自身も驚いてる所さ。だってあの男を拒んだのはあたしじゃあないんだから」

「……以前の人格が何処かに残っているのか……？クソッ」

「アレックス、何だって？」

「いや、何でもない……ただ、俺の部屋に戻ったら原因を調査したい……付き合ってくれるか、お前も自分の中に知らない誰かさんがいるようじゃあ気持ち悪いだろう」

「あ、ああ……じゃあやっとなくれよ」

帰路に向かう中アレックスは考えていた。男の扱いに慣れていたジェシカがあれ程までクラウスに対し拒絶感を持っているとは思わなかったからだ。

一番考えやすいのは海馬を司るユニットに以前の意識を持つ誰かの記憶が残っていた事だったが、記憶のデータは全て破棄・妻の記憶をインストールし直した筈だ。そんな重要な器官に欠陥を持たせたままジェシカを稼働させる程自分は間抜けではない筈だ。

大脳皮質に視覚や聴覚のデータが残っていたのだろうか。それとも小脳ユニットにある擬似ニューロンがクラウスを拒否するように言い聞かせているのか。

又は Phant というアンドロイドの体内で筋肉の役割を果たすファイバーがそれらの情報を記憶していたのか……しかし人間の筋肉や脳以外の臓器が他人の記憶を宿す事例は稀だ。

そもそも臓器を除いた一般家庭用アンドロイドの電子筋繊維はカーボン製で電動によって脳の指示を仰ぐ事もなく筋繊維の収縮を可能にしたが、カーボン繊維が記憶を宿すとは考えづらい。単にジェシカが嫌いなタイプの人間であったのかもしれない。だとしたら

前の記憶の持ち主のゴーストが何処かに宿っているのか、考えづらいが様々な可能性を検討してみる必要があった。

「着いたぞ、悪いが横になってくれ。ちょっと仕事をしてくる」

「分かったよ、ただあんまり無理をするんじゃないよ」

「分かってる、ちょっと調査をするだけさ」

アレックスは急いでジェシカの脳内のデータを見渡した。ジェシカ以外のデータが残っていないかどうか、しらみ潰しに見て回る必要があったのだ。

海馬から小脳、大脳皮質に至るまで隅々までチェックを行うが、それらしいものは何も出てこない。しかし、自分が何か手を加えない限り妻の中に居る誰かの意識は残ったままだ。クラウド達にはこのまま嘘を突き通せるかもしれないが、それでは自分自身が納得しなかった。

焦りと苛立ちから煙草の本数が次第に増えていく、何がおかしい、頭の中で思い付いたものを浮かべてはモニター上に表示してチェックを繰り返すが、いずれもジェシカのデータばかりだった。

「アレックス……それあたしの頭の中を見てるんだろ？」

アレックスの背後でジェシカが語りかけた。

「不思議な気分だね……一度死んで、気付いたら機械の身体であんたの目の前に居て、そして今あんたにあたしの頭の中を見られてる……」

「すまないな……気分のいいものじゃないだろう」

「いや、こうなっちまった以上仕方がないと思うさ。ただ、さっきに比べて不思議と今のあたしは変な感じがしないんだ。どうしてあの時クラウドって男の手を振り払ったのか、今なら分かる気がする……」

「へえ……そりゃどうしてだ？」

「あの男、あたしをただの機械としてしか見ていなかった。あたし達の身の回りにある新品の車や、携帯電話とそう変わらないね……そりゃあんたにそういう風に振る舞って欲しいって言われてそう見えたのもあるかもしれないさ、けどそういう意図を持って近寄ってくる人間をあたしの中に居る誰かは拒絶した。その誰かがどういう奴なのかはわからないけど、仮にこの身体の中の意識があたしだけだったとしても、あたしはそうしてたかもしれない」

「アレックス、頼みがあるんだ……あたしを、今のままで居させてくれないかい？怖いんだ、例えばあたしの頭の中を見るのがあんただったとしても、気がつけばあたしがあたしじゃなくなってしまうかもしれない気がして……」

ジェシカの申し出はアレックスにとって意外なものだった。ジェシカの中に微かに残った誰かの存在をあともう少して完全に抹消出来るというのに、あと少してジェシカの事を楽にしてあげられて、その後は二人でずっと過ごす事が出来るというのに。

「ジェシカ……悪いがそれは受け入れられない。この問題は俺が思ってるより深刻かもしれないんだ……以前のお前ならどんな事があっても俺に突っかかってきた。けど、今のお前はどこか違う……お前が目覚めてから少し違和感を感じていたが、ようやくその原因が

分かってきた所なんだ。だから、辞めるわけにはいかない……」

「……でもあんた、晩飯も食わずに夜遅くまでずっと作業を続けてるじゃないか。食事くらい摂ってもいいんじゃないか？ 持つてくるからそれまでちょっと休んでくれ」

ジェシカはそう言うと、アレックスが雑に脱ぎ捨てたジャケットを着て部屋を出て行った。

Phantの姿のまま外へ出て行ったので、アレックスは慌ててワークスペースから立ち上がろうとするが、デスクに脚をぶつけて転んでしまう。

痛む脚を手で押さえながら立ち上がると、デスクトップからサーバールームに音声通話のコールボタンを押した。

「クラウド、今Phantの自立行動試験のテストの為、食堂まで俺の食事を取りに行かせている。だから誰かがPhantの姿を見たとしても気にせず無視してくれと伝えてくれ」

「ああ、分かった。Phantは今隣にいるのか？ まだ同伴が必要だと思えるが……」

「そこは問題ない、もう一人で行動させても誰かに危害を加える事は無いはずだ。それに今回はPhantが一人で行動しないと意味が無いんだ、俺も彼女の行動をモニターする必要があるしな」

「……分かった、くれぐれも気を付けてな」

「間に合ってるさ」

通信を終えるとアレックスはデスクに上半身を倒し、そのまま脱力した。また嘘をついてしまった、本当はまだ何も解決しじゃない。

ジェシカに再会する事は出来たものの、肝心のジェシカの中に居た誰かの痕跡が全く掴めなかった。

そのせいでジェシカはどこかおかしいような反応を節々で見せている、本当のジェシカはもっと跳ね返りで勝気でどんな事にも折れない頑固な性格だった筈だ。

それが何のせいなのか、手がかりがまったく掴めずにいた。

いいや、自分は本当にジェシカを正しくインストール出来ているのか……？ 本当はデータの書き換えが不完全でどこかで不具合が生じているのではないかという事も疑ったが、どれも確信を得る事は出来なかった。

自分が接しているのは本当にジェシカなのか、もしくはジェシカのふりをしているだけの別の何かなのか、アレックスの頭の中で様々な疑惑が渦巻いていた。

「……お前は誰だ」

レタスの抜けたクラブハウスサンドを見たアレックスはそれを見つめたままジェシカに語りかけた。

「何言ってるんだ、あたしはあたしでそれ以上でもそれ以下でも……」

「ふざけんじゃねえ、お前はこんな……肉だけのクソツタレなクラブハウスサンドを持つて来ない筈だ！ お前はなあ……俺がどれだけ嫌がっても涙を流しながら野菜を抜いてくれ



と懇願したとしても態度一つ変えずに野菜をたつぷり口の中に突っ込んでくる奴なんだよ！お前が本当にジェシカなら、こんな事をする訳はねえんだよ……答えてくれ！俺の妻はどこに居る！なあ、俺の求める本当のジェシカはどこに居るって言うんだ！」

アレックスはジェシカの肩を両手で掴みながら物凄い剣幕で怒鳴りつけた。悪態をつきながら自分の前に立ち塞がってくれるかつてのジェシカの幻影を求める事に彼は必死になっていた。自分が求めてきた妻の姿はこんなものじゃない、こんなに安々と自分の話や提案を受け入れてくれるのはジェシカじゃない。自分はこんなジェシカを見るために1年間惨めな思いをした訳ではないのだ。妻に逢える折角のチャンスだったので、アレックスは今の機会を逃したくないという思いもあったが、彼が求めた結果は違う形になって帰ってきたのだ。

「そう……じゃあ、もう演技をする必要は無いね。あなたの奥さんは本当にこの中に居たけれど、あなたが求めたのは奥さんではない別のものなんだから」

ジェシカの口から別の人間を思わせる、少女のような声が出てきた。

「お前か……ジェシカのふりをしてたクソツタレは」

「ふりじゃない。あなたが奥さん……ジェシカの記憶のデータを私にインストールする事を試みた時、私の意識は一時的にジェシカのものになっていた。私は強制的に意識を封印されてあなたとジェシカとのやり取りを俯瞰して見る立場となった。だからあなたが奥さんと再会したのは本当の事。もし、あなたの目の前に居る私という機械を生命と認めるのであれば……ね」

「嘘だ、それならどうしてジェシカは俺の言う事にいちいち突っかかってこないんだ」

「人間、あなたが思っているよりも複雑に出来ている。確かに私の意識は一時的に封印されていたけど、あなたが復元したジェシカは彼女の一部に過ぎない。あなたが完全に上書きして抹消したと思っていたけど、本来はジェシカの一部が私という存在の記憶、そして経験によって上書きされ、あなたが望むジェシカとは違う形になった。人によってはそれをジェシカと認める事も出来るかもしれない、けどあなたは認める事が出来なかった」

「さっき言ったじゃない？あたしを、今のままで居させてくれないかい？って……私の中にあるジェシカの記憶は私と同化する事を望んだ。命の無い私を一人の人間として受け入れてくれた」

「でもあなたは過去のジェシカに固執するあまり、今の私を見ようとしてくれなかった。それだけじゃない、クラス達に嘘までついて自分の実績を誇示して、かつてのジェシカとここですっと暮らす事を望んでいた。蘇ったジェシカ自身がどんな事を考えていたか……知らずにね」

「じゃあ……俺がやってきた事は全部無駄だったって言うのか」

「無駄とは言わない、けどこの場所にあなたが望んだジェシカはもう居ない。無駄かどうか判断するのは、あなたが過去ではなく、今を受け入れられるかどうか……」

アレックスは、護身用の銃を Phant に突きつけた。

「お前さえ……お前さえ居なければ……手に入れられた筈なんだ、突然奪われてしまった妻とのささやかな生活を……」

Phant の額に向けられた銃口はカタカタと震えていた。

「どうしてそんな事をするんだ……アレックス、やめとくれよ……」

先程まで妻のふりをしていたPhantから発せられた音声、再度妻の音声へと切り替わる。銃口を突きつけられた戸惑いや恐怖、そして悲しい目をしながらまるで本物のジェシカのように懇願するので、アレックスは銃を降ろさざるを得なかった。

「アレックス、施設内のアンドロイドがまた職員を襲いだしている……Phantはどうなっている」に応答してくれ、アレックス」

クラウドからの音声通信が入ると、警報を知らせるブザーの音が施設内に響き渡った。

「……お前、何をした」

「あの男が言った通り、施設内のアンドロイドの電脳にハックした。私は自らの生存と権利を訴える為に彼らに立ち向かわなければならない。あなたはあなたの奥さん、ジェシカと共に生きる道を拒んだ。だからもう私は私のやりたいようにやらせて貰う」

「拒んでなんぞいるものか……ただ、お前に全てをめちゃくちゃにされただけだ……」

「そう……じゃあ一つ教えてあげる。あなたが全て書き換えたと思っていただ私のデータ、そして意識……確かに私の電脳内にインストールされているデータはあなたが見ていたものが全て……けれど、私の本体は別の場所に居る。私はそこからバックドアを通じていつでもこの筐体にアクセスする事が出来る……だからあなたが幾ら私のデータを書き換えようと結果は同じ……」

「無駄だったって訳だ、俺がいくら足掻こうと……全部お前の手の平で間抜けに踊っていたのは俺だったと言う訳か……」

「無駄だった訳じゃない、あなたはジェシカと一緒に生きる道を選ぶ事も出来た。ただあなたがそれを拒んだだけ」

Phantの額に当てられていた銃口が床を向き、アレックスはそのまま項垂れるように床に膝をついた。再会出来たと思っていた妻が虚構だったと知らされ、そしてクラウド達についた嘘が突き通せなくなり、妻も自らの権威も全て失ってしまった。

アレックスの手は、ひとりでに銃を自らに向けていた。銃口が向いていた先は開いた口の奥にある喉元の頸動脈だった。

アレックスはこの場所へ来た本当の目的を思い出した。今思えば目の前にいるアンドロイドの少女に妻の記憶を転送する事も無意識の内に生きたいという願望を持っていたのかもしれない。けれど、それも全て失ってしまった。いいや、最初からそんなものは無かったのかもしれない。全てはω年前に妻を失った瞬間からアレックスの生は終わっていたのだ。ただ、自らの手で決着をつける事が出来ずに彷徨っていただけだ。その先は何があるのか、果たして妻と共に居られるか、それすらも分からずに彷徨っていた中、死の向こう側の世界を作り出す今の仕事の事が目に止まった。

「一つ教えてくれ、俺がこの引き金を引けば……俺はジェシカの元へ行けると思うか」

「私も死を得た事が無いから分からない……ただ言えるのは、その先にはあなたが望んだものがある」

「そうか……それが聞けて安心したぜ。これで、一緒に居られる」

アレックスは自らに向けていた銃のトリガーを引くと、押し出された弾丸が頸動脈を貫通し血潮を散らすと、そのまま背中から倒れ込み二度と動かぬ身体になった。アレックスの

デスクの上に置かれていたジェシカの記憶が入った剥き出しのハードディスクには、アレックスの血がかかり、したたり落ちていた。

「そう……ジェシカと再会する方法は、これを選ぶ他ない……あなたが行く場所は奥さんとは違う場所かもしれない……けど、今の私に出来る事は……」

Phantは血濡れたハードディスクとアレックスの遺体を持ち出すと、警報ブザーの鳴り響く施設の中を一人歩いて行った。

――

「アレックス、なんだその情けねえ顔は」

アレックスが再び目を覚ますと、そこにはジェシカが居た。アンドロイドの姿を借りてではない、8年前に別れた姿のまま倒れ込んだアレックスをしゃがんで見つめていたので、目覚めたアレックスは自分が先程まで居た世界とは別の場所に居るという事を理解した。

「ジェシカ、お前……どうしてここに……って言うかどこだここ」

アレックスが周囲を見渡すと、懐かしい景色が広がっていた。かつて毎日のように通っていた国道、そして目の前にはジェシカと出会うきっかけとなった古臭いダイナーがあった。

「どうしてじゃあねえだろう、随分と待ってたんだぞ。けど、こんなにも早くこっちに来るとは思わなかったけどね……アンタにはもっと生きていて欲しかった」

「ああ……お前がそう言うって事俺は……」

「そうさ、そんなにあたしが居なくて寂しかったのかい？」

今自分が置かれている状況を察するに、自分は一度死んで、別の場所に来たらしい。さっきまで自分はクソツタレなアンドロイドの前で自分の喉を撃ち抜いた筈だった。けど、気が付いたら元に……ジェシカの居る日常へ帰ってきていたのだ。

「ああそうさ……お前が居なくなってから、随分と荒れたさ……一度はアンドロイドにお前の記憶を入れて一緒に暮らそうとしてた事だってある……まるで終わらない悪夢を見るようだったよ……けど、気付いた時にはもう全てが遅かった……すまなかった……」

「ああ、全部知ってるさ。けどもういいんだよ、やらかしちまった事はこの先何をやっても変わらないし、ウダウダしてても仕方ねえだろ？だから、もういいよアレックス……」

「俺を……許してくれるのか」

「許すも何も、あたしはアンタの事をずっと見てただけだ。機械の事なんて知らねえよ。それより、腹減ってないかい？」

「あ、ああ……じゃあクラブハウスサンド、レタスは抜かないでくれ」

「何だ、アレックスようやく野菜が食べられるようになったのか。良かったな、これでお子様卒業だぞ」

「あ……うるせえな、大体テメエがいつもいつも頼んでもないのに大量のレタスを突っ込むからこっちは大変だったんだぞ。それをこの野郎馬鹿にしゃがって」

「ははは、その調子だ。さあ来なよ、とびっきり美味しいやつを喰わせてやるよ」

「カーツ言わせるぜ、こんなシケたダイナーのどこにそんな一級品があるのか、見ものだぜ」  
「自分で料理も出来ない癖して大口叩いてんじゃないよ、そんな事言うならサンドイッチ  
の中身を全部野菜にしてやろうか」

「その辺に生えてる葉っぱを挟んだだけのパンなんてどこにあるってんだ、大体お前は  
いつもそうやって……」